歴史地理学調査報告　第10号　55～69　2002

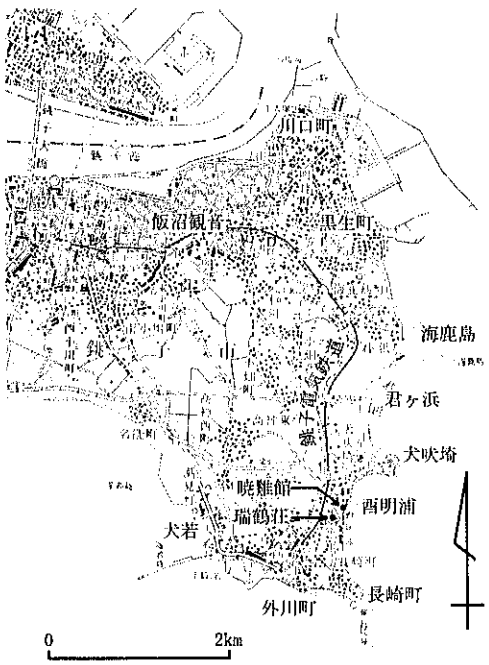
観光拠点としての「犬吠」の形成と開発資本の動向

髙橋珠州彦

Ⅰ　はじめに

本報告では，千葉県銚子市の観光地としての性格に着目し，特に犬吠付近が銚子観光における一拠点となる過程と，その過程に関る開発資本の動向について明らかにすることを目的とする。

関東地方の東端で，太平洋に突き出すように位置する犬吠埼（第１図）と，そこに建つ犬吠埼灯台は，今日，銚子観光を代表するシンボル的な存在となっている。このことは，銚子市産業部商工観光課による平成12年（2000）発行の観光案内パンフレット[1]の表紙が，磯浜の海岸越しに犬吠埼灯台を望む写真で飾られていることに象徴的に表



第１図　対象地域図
（国土地理院発行５万分の１地形図「銚子」より作成）

されている。

後述するように，犬吠埼灯台は，日本に導入された洋式灯台の中でも，ごく初期に設置されたものであり，銚子のシンボルとして人々の関心を惹きつけてきた。しかし，犬吠埼灯台が設置される以前から銚子は，港町としての町の賑わいや，寺社，磯浜の海岸風景などが人々の関心を惹き，観光地としての性格をもっていた[2]。飯沼観音のように銚子の町中や，海岸といっても犬吠を含む半島全体が観光コースであった時代から，次第に灯台のある犬吠が傑出した観光拠点に変化し，今日に至っている。

このように銚子の観光は，何らかの画期があり，その以前と以後では観光の内容に変化が生じていたものと考えられる。本報告では，明治初期に設置された犬吠埼灯台の出現がきっかけとなり，大正期以降に，犬吠付近が観光の一拠点化する時期を，銚子観光の画期と考えた。こうした画期により，銚子地域を訪れるようになった観光客に対して，地元の人々はどのように対応してきたのであろうか。

以上のような視点から，本報告ではまず，本章において先行研究を通覧したのち，第Ⅱ章において，犬吠埼灯台設置以前の銚子観光について考察する。ここでは，近世に銚子を訪れた文人らの作品を用い，作品中に紹介された名勝と，名勝を紹介する記述から，犬吠埼灯台設置以前の状況について把握する。第Ⅲ章では，第Ⅱ章で明らかとなった，犬吠埼灯台設置以前の銚子の名勝が灯台設置の建設以降，いかに変化するのか考察する。ここでは，犬吠埼灯台設置以降に犬吠付近に出現した旅館や皇族の別荘，観光客を輸送する手段として設立された鉄道会社について概観する。また，灯台の設置以降に変容する銚子観光や，観光

の拠点となりつつある犬吠の状況について，各種の案内書の記述から考察する。さらに第Ⅳ章では，第Ⅲ章で取り上げた旅館と鉄道会社を銚子観光における重要な観光事業ととらえ，それらの出資者や会社役員の顔ぶれから，観光業の充実と地元の人々のかかわりを考察する。

銚子の観光については，銚子市史編纂委員会編(1956)[3]に，文人の来訪を含めて名所の紹介がなされている。観光地の開発と開発資本の関係については老川（1999)[4]などの研究がある。老川はこの中で，観光地が外部資本としての土地会社により開発されていく過程を分析している。また，鉄道事業と地域社会の関係を，沿線住民の株式所有状況から考察した研究では，三木（2000)[5]などの研究がある。三木はこの中で，小規模な鉄道事業が，地域住民らの出資により設立され，運営されている事例について分析している。さらに銚子における鉄道事業については，白土（2001)[6]がある。新旧の観光案内書を分析した研究では，浮田・伏見（1999)[7]がある。本報告では，こうした研究をふまえたうえで，地域社会が近代観光地形成の過程に，いかに関わってきたのかを考察する。なお本報告では，現在の銚子の中心市街地と犬吠や外川付近を含む，やや広範な地域を便宜的に銚子と表記する。

Ⅱ　近世の記録に紹介された銚子の観光

今日に至るまで，銚子を訪れた文人は非常に多く，彼等が残した銚子に関する作品も非常に多い。こうした文人のうち，銚子にゆかりのある作家[8]のみを取り上げても，50人を越える名前を挙げることができる[9]。本章では，特に近世に銚子を訪れた文人が銚子のどの場所を巡り，それらの場所をどのように見ていたのか考察するために，近世の銚子を紹介する典型的な作品として，以下の2作品を取り上げる。その一つは，嵩嵩谷（こうすうこく）による天明4年（1784）の『銚子名所漫遊図巻[10]』で，二点目は赤松宗旦による安政5年（1858）の『利根川図志[11]』である。

1）『銚子名所漫遊記図巻』に描かれた銚子

この作品の作者である嵩嵩谷は，享保15年（1730）に江戸で生誕し，文化元年（1804）に75歳で没した英派の絵師である。嵩谷は，英一蝶門下の佐脇嵩之から一蝶の画風を学び，一蝶風の風俗画を得意とした人物といわれる[12]。本稿で取り上げる『銚子名所漫遊記図巻』は，嵩谷が54歳の時に銚子を訪れ，作成したものである。この作品には，嵩谷が訪れた場所の風景と，その場所の簡単な説明がつけられている。また末尾には，以下の記述が見られる。

東都散人嵩谷銚子港遊暦之際磯見物之時則チ眺望ナカラ画キ連日三日ニ而図成ル
天明四申辰
青柳氏所蔵

この記述から，嵩谷が銚子を訪れた時期などの詳細については判らないものの，銚子に3日間滞在し，磯浜巡りをしながら風景を写生していたことがわかる。なお，この作品は銚子市猿田町の糟谷家で発見されたものといわれているが[13]，記述にある「青柳氏」については不明である。

次に，この作品に描かれた風景から，嵩谷が巡った場所について見ていく。作品中，最初の場面に描かれているのは「観世音」である。これは，今日の銚子市飯沼町にある飯沼観音のことで，作品中にも，「飯沼山円福寺ニアリ飯沼村坂東二十七番ノ札所ナリ」との記述がある。絵の構図は利根川の水面上か，もしくは対岸から飯沼村を遠望したものとなっており，飯沼村の海岸付近のものと思われる家並みが描かれ，その奥に観音堂の屋根が描かれている。飯沼観音の次には「ハテシバノ松」が描かれている。この松は「荒生村池之端」にあると記されているが，具体的な場所は特定できない。3ヶ所目の絵は「妙見宮」となっている。これは，今日の銚子市妙見町にある妙福寺境内の妙見社と思われる。作品中，「毎月十四日夜参詣者多シ」と記述されており，絵には月の出ている夜に多くの参詣者が集まっている様

子が描かれている。

「妙見宮」に続く9ヶ所は，海岸風景となっている。描かれた海岸風景について，以下に名称を書き出す。なお小括弧中に記した地名は，筆者による注記である。描かれているのは，順に「仙ヵ岩屋　犬岩」(犬若)，「ナガ崎ノ浦」(長崎町)，「畳塚」(外川町)，「中瀬ノハナ」(長崎町)，「犬ボ井ノハナ仏ノ浦」(犬吠埼)，「馬フン石　胎内クゝリ」，「石キリ」，「キリカ浜」(海鹿島町)，「クロハエノ浦」(黒生町) となっており，磯浜の風景が中心に構成されている。特に独特な名称をもつ奇岩などには，名称の由来や周辺の風景について，簡単な解説がつけられている。こうした磯浜の風景は，岩の形状や荒波の様子が力強く印象的に描かれている。磯の風景画の次には，「河口」として「白紙大明神　干鰯場　納家　大船入津　飯貝根人家」などの様子が遠景として描かれている。作品中に，「清水ノ台ヨリ一眼ニ見渡ス」と記述されているように，遠景の構図は，清水町の高台から利根川河口の方向を望んだものとなっている。

本作品中最後の場面は「本城下タ之鮭」という題がつけられ，「八月九月トル　ホケアミト云　網呂木ナリ」という解説が添えられている。絵の構図は，利根川に浮かぶ2艘の屋形船で賑やかに宴会が行なわれている様子が描かれ，屋形船の後方に棒受け網とみられる仕掛けが描かれている。またこの絵には，利根川を望む座敷も描かれ，縁側から川を望む女性や，座敷で三味線に合わせて舞う女性達の様子が描かれている。

2)『利根川図志』に紹介された銚子

『利根川図志』の作者である赤松宗旦は，医師赤松宗旦（初代）の子として，文化3年（1806）に下総国相馬郡布川村で生誕し，文久2年（1860）に57歳で没している。二代目宗旦は文化10年（1813）に8歳で父と死別した後，母親の生家がある下総国印旛郡吉高村に転居し，医術を学んだ。その後，天保2年（1831），33歳の時に布川村に戻り医師として開業した。この二代目宗旦は安政元年（1854）49歳の時に『利根川図志』の編集を開始し，安政5年（1858）53歳の時，同書を完成させた。同書の編集に使われた資料は，初代宗旦が収集したものといわれている[14]。

『利根川図志』は，利根川流域の地域や寺社，風景，物産などを文章と挿絵により紹介している。このうち銚子に関する記述は，『巻六」に収録されている。紹介しているのは「猿田大権現」，「高田川対陣」，「海上八幡宮」，「松岸」，「銚子」，「飯沼観世音」，「名物」，「清水の井」，「和田不動堂」，「川口明神」，「千人塚」，「川口」，「目戸ヶ鼻」，「葦鹿島」，「カン石」，「犬吠ヶ崎」，「長崎ヶ鼻」，「外川の浜」，「仙ヶ岩屋」，「犬若」，「名洗浦」である。これらのうち，「猿田大権現」から「千人塚」までは，寺社や伝説などを中心に，銚子の町について説明している。これに対して「川口」の項には，「是より南の方へ磯つゞきに行くを浜めぐりと云ふ。名所多し」との記述があり，「川口」から「名洗浦」までは，奇岩の紹介や海岸地形による風景の紹介が中心となっている。

「銚子」の項では，「そもそも銚子は関東第一の湊にして，人家五千に余れりといふ」などとして，町の賑わいについて説明している。また，「飯沼観世音」の項も，「境内に見世物軽わざしばゐ，其外茶見世多く至つて賑はし」として紹介されており，この付近が娯楽要素を持った中心地であったことを窺わせる。なお「銚子」の項では，和田不動堂付近からの眺望についてもふれ，「浜めぐりの人々も，まづこゝに憩うて時をうつすの勝地なり」として，当時の磯浜巡りを始める際には，ここが出発地となっていた様子を記述している。

「川口」から「名洗浦」の磯浜巡りを中心とした紹介では，文章による紹介の他，挿絵として，「銚子浜磯巡の図」，「銚子浦浜巡海獺嶋眺望の図」，「海獺島を望遠鏡にて見たる図」，「海獺の図」，「銚子浦犬若嶋千騎岩之図」，「銚子名洗浜の図」が掲載され，読者が磯浜の風景を思い浮かべやすい構成となっている。特に「海獺島」の項では，地名の由来となった海獣のアシカについて

も，「海瀨の図」を用いて詳細な解説をおこなっている。犬吠については，「犬吠ヶ崎」の項で，「海上砥（荒砥なり）是より出る。故に一名石切の鼻とも云ふ。此所に胎内くぐりといふ岩窟ありて，浪うち涯へ通りぬけ，岩山へはひ登る。甚だ難所なり。あしか島より此所までを霧ヶ浜といふ。大浪の打寄する磯輪なれば，浪しぶき飛散りて常に霧の晴れざるが如し。砥石山より地蔵坂を下りて，仏浜を通り長崎にいたる」と記されている。このように犬吠付近は，砥石の原料となる石材を産出するほか，特に険しい磯浜であったことがわかる。

また，これらの磯浜を中心とした紹介の中でも，「長崎ヶ鼻」と「外川の浜」の項では，漁村について若干の記述も見られる。特に「外川の浜」の項では，「此処むかしは家数千軒有りし猟場なるを，今より七八十年以前，津浪にて家を流され亡失したりしが，今はまた家数多く出来て大猟場となれり」との記述が見られ，外川の漁村が明和期（1770年前後）ころ受けた津波の被害から復興している様子を記している。

以上，近世に銚子を訪れた代表的文人が，銚子付近の名所をどのようにとらえ，描いたか，二つの作品を紹介してきた。この二つの作品に共通する点としては，銚子の中でも，興野地区や新生地区といった町場では飯沼観音をはじめとした寺社に関する記述や，町の賑わいに関する記述が中心となっている。これに対し，黒生付近から南の外川地区にかけては，磯浜巡りとして紹介され，地形の特徴や奇岩の紹介が中心となっていることが挙げられる。こうしたなかでは，今日は銚子観光の拠点となっている犬吠も，磯浜巡りの中の一ポイントとして描かれているに過ぎない。本章で取り上げた2作品のほか，近世に銚子を訪れた文人の作品でも，銚子の町場と磯浜巡りを組み合わせた傾向がみられる。こうしたことから，当時の銚子における観光に結びつく要素には，飯沼観音を中心とした町場と磯浜巡りの二つの重点があったものと想定される。

Ⅲ　観光拠点「犬吠」の形成と銚子観光の変容

本章ではまず，明治初期の灯台設置以降，犬吠付近に立地した旅館暁雞館（以下，株式会社組織となった旅館暁雞館を「暁雞館」と略記）と伏見宮別邸瑞鶴荘の建設状況について概観する。さらに，犬吠付近にこうした諸施設が立地したことにより，銚子観光がいかに変容したのか，明治末期から昭和初期にかけて発行された観光案内書の記述から考察する。

1）犬吠付近における諸施設の建設

航路標識として洋式の灯台が日本に最初に採用されたのは，明治2年（1869）といわれている[15]。犬吠埼灯台は，このわずか3年後の明治5年（1872）に建設工事が開始され，明治7年（1874）に竣工した。犬吠埼は，銚子港に出入りする船舶や横浜北米間航路の要衝であると同時に，航海の難所であったため，航路標識を設置する必要性があった[16]。犬吠埼灯台を設計した人物はイギリス人のリチャード・ヘンリー・ブラントンである。いわゆるお雇い外国人技師であったブラントンは，「日本の灯台の父」といわれており，明治元年（1868）から9年間日本国内に滞在し，各地に28基の灯台を建設した[17]。こうした経緯により建設された犬吠埼灯台は，日本国内における最古の洋式灯台の一つといえる。

犬吠埼付近は，これまで磯浜巡りルートの一つに過ぎなかったが，このとき出現した洋式灯台は，周辺の風景に大きな影響を与えた。こうした状況は，以下の記述からも窺える[18]。「灯台建設以来各地から灯台の観覧を請ふてくる人々が日を逐ふて多きを加へる様になり日ならずして此の附近に茶店旅館別荘等が軒を並べること丶なつて大正三年十二月には銚子遊覧鉄道の開通を促がし茲に全く昔日の観を改むるに至つた。」

以上のように犬吠埼付近は，灯台の建設以来，磯浜巡りの一地点から，単独で観光の目的地となった。次に，こうした状況下，犬吠付近で最初に建設された旅館について検討する。

犬吠付近で，観光客を対象として最初に立地した施設は，銚子の有志らが明治18年（1885）に営業を始めた，灯台見物客むけの茶店であるといわれている[19]。この茶店は，その後明治20年代に旅館業務を開始し[20]，今日の暁雞館へと引き継がれている[21]。明治10～20年代は，日本国内において，治療行為としての「海水浴」が開始された時期とされている[22]。暁雞館では，旅館業を開始したころから潮湯治客を相手にしていたものと考えられ，後に潮湯も開始した。それまで犬吠付近の海岸は，磯浜巡りのルートであったが，新たに「海水浴」を目的とした来訪者が訪れるようになると，犬吠付近は灯台見物と相俟って，銚子における観光の一拠点となった。さらに，明治30年（1897）に総武鉄道の佐倉銚子間が開通し，銚子駅が開設されると，暁雞館では銚子駅前に海産物を中心に扱う土産物店を出店し，同時に宿泊客への案内業務も開始した。また，大正２年（1913）になると，銚子・犬吠間に銚子遊覧鉄道株式会社（以下，「遊覧鉄道」と略記）が開業し，鉄道による観光客輸送が開始された。この鉄道事業と暁雞館の関係については後述する。

近代の犬吠付近は，皇族の別荘地として選定された場所でもあった。犬吠に建設されたのは，伏見宮家[23]の私的な別邸として建設された瑞鶴荘である。瑞鶴荘は，明治36年（1903）に起工され，明治38年（1905）に竣工した[24]。これは，伏見宮第21代貞愛（さだなる）親王が48歳の時であった。貞愛親王は，大正12年（1923）に66歳で没するまで毎年のように避暑や避寒のため，銚子を訪れていたという[25]。瑞鶴荘は貞愛親王が没した後，大正15年（1926）には，銚子醤油株式会社４代目社長である濱口麟蔵に売却され，それ以降は昭和８年（1933）に塩水港精糖社長の岡田幸三郎，昭和21年（1946）に桜護謨社長の中村庸一郎と，千葉県出身の実業家らに転売された[26]。伏見宮家が所有していた時期の瑞鶴荘は，銚子の観光案内書でも紹介されており，特に大正２年（1913）発行『銚子案内[27]』では，「林中に伏見宮殿下の別邸あり，俗塵を去り霊気鐘（あつま）る。」と記述されている。このように，犬吠にある皇族の別荘が紹介されたことは，観光地として，少なからず集客効果をもたらしていたものと考えられる。

瑞鶴荘の敷地には，主屋，茶室，潮見亭，撞球場，倉庫などの建物があったほか，庭はいくつかの日本庭園が組み合わされたものであった[28]。これらの建物や庭園は，海岸の風景を借景とした設計がなされていた。

以上，灯台の設置以降に見られた旅館や鉄道の整備，皇族の別荘建設について概観してきた。さらにこうした諸施設の立地により，犬吠付近が磯浜巡りの一名所から，灯台見物や海水浴を目的とした観光の一拠点へと変容する過程についても見てきた。こうした変容は，犬吠付近の風景を大きく変えただけではなく，銚子観光の形態そのものにも変化をおよぼした。つまり，町場の寺社参詣と磯浜巡りが近世以来の銚子観光の重点であったが，灯台の建設以来，次第に近代的設備の見物や海水浴のため，観光客が犬吠付近に滞在するようになり，この頃から犬吠付近が銚子観光の重要な地位を占めるようになったといえる。

次節では，本節で扱ってきた銚子観光の変容について，いくつかの銚子に関する案内書などの記述から考察を進める。

２）『案内書』に見られる銚子観光の変容

本節では，この時期に見られた銚子観光の変容が，人々に対してどのように紹介されていたのか，明治後期から昭和初期に発刊された，いくつかの案内書の記述から考察する。特に中心に扱うのは，明治41年（1908）発行『銚子案内[29]』（以下，明治41年『案内』と略記），大正２年（1913）発行『銚子案内[30]』（以下，大正２年『案内』と略記），昭和３年（1928）発行『銚子案内[31]』（以下，昭和３年『案内』と略記），昭和15年（1940）発行『銚子商工案内[32]』（以下，昭和15年『案内』と略記）である。これらの案内書は，それぞれ作成者が異なっているが，内容の主な構成は，町の概要，名所の紹介，各種産業の紹介，産物の紹介のほか，名所の写真，各種業者の広告などとほぼ共

通しており，特に名所に関する記述では相互の比較が可能である。昭和15年『案内』は，銚子商工会議所によって編集されたものであり，商工業の紹介や商工業者の一覧などに多くの紙面を割いている。しかし，観光に関する記述も多いため，ここでは『銚子案内』との比較に用いた。

明治41年『案内』の緒言をみると，「近時交通機関ノ備ハルニ従ツテ我カ銚子海岸ノ奇勝漸ク世ニ知ラル、ニ至レリト雖モ未タ以テ大磯鎌倉ノ如キ盛況ヲ呈スルニ至ラス，是レ畢竟完全ナル出版物ナクシテ汎ク世人ニ紹介スルコトナカリシニ因スルモノカ[33]」と記述されている。このように明治41年『案内』の緒言では，こうした案内書を発刊する理由を述べる。また，それと同時に，当時の銚子観光は，明治30年（1897）の総武鉄道銚子駅開業以降も，大磯や鎌倉と比べて活況を呈していなかったことも述べている。ここで大磯や鎌倉といった海水浴場の地名が見られるのは，銚子も海水浴場であることを意識していたことを窺わせるが，同じく緒言の中では「大磯鎌倉ノ如キ女性的風致ニ乏シトスルモ，三里ノ海岸怪岩奇礁兀立シ」と表現している。こうした表現から，銚子は大磯や鎌倉とは趣の異なった磯浜海岸であることを強調している。

ここで，これらの案内書に記述された銚子の名所を属性ごとに類型化し，検討を加える（第１表）。名所の類型は６に分類でき，磯浜風景や奇岩などの自然景観に関するもの，海水浴場，寺社，灯台などの近代的な各種施設，石碑や墓所などの旧跡，町や漁港などの人文景観を紹介するものとなる。また，銚子の周辺地域と組み合わせた観光形態として，水郷巡りが紹介されている。以下では各案内書に紹介された名所と，その傾向について検討する。

明治41年『案内』では，自然景観と寺社の類型に分類される名所が多く，特に海岸の風景を，写真を多用して紹介していることが指摘できる。これは，案内書の構成に観光名所全般を扱う項目がなく，「磯めぐり」と「寺院」の項目が設けられているためであり，この二つが銚子観光の中心であったことを窺わせる。なお，いくつもの磯浜の景色を紹介しつつも，海水浴場としては，酉明浦[34]の写真が掲載されているだけであり，この他「磯めぐり」の項目中，黒生浦，犬吠，犬若の各紹介文に海水浴旅館が数軒あることについて触れているのみである。さらに，犬吠埼灯台についての紹介もみられ，犬吠埼灯台が銚子観光の名所として扱われていたことがわかる。

大正２年『案内』の項目を見ると，明治41年『案内』と同様に，自然景観と寺社が中心に紹介されている傾向がわかる。また，明治41年（1908）に建設された航海無線施設である「無線電信局」や，同じく明治41年に建設された，波力による発電実験施設である「波動電気」について紹介されている。これらは，当時先進的な技術を用いた施設であったことから，犬吠埼灯台とあわせ，詳細な記述が行なわれている。こうした記述から，犬吠埼灯台周辺でみられた近代的施設の立地が，犬吠付近を銚子観光の一拠点化するきっかけとなっていたことが窺える。

昭和３年『案内』になると，名所の紹介に若干の変化がみられる。昭和３年『案内』は，今回扱う案内書の中でも，紹介されている名所の数が最も多いが，特に案内書の構成に「海水浴場」の項目が設けられていることが大きな特徴といえる。このことは，銚子の海岸が観賞の対象から，海水浴として利用の対象へと変化してきたことを示している。このことから銚子が，海水浴を中心とした海岸観光地として，広く知られるようになってきたことを窺わせる。

昭和15年『案内』を見ると，史料の性格上，多くの名所が紹介されているわけではないが，そのなかでも海水浴場が比較的多く紹介されている。また一方では，昭和３年『案内』まで紹介されていた複数の寺社については，円福寺の飯沼観音に関する紹介のみにとどまっていることが指摘できる。これは，犬吠埼灯台の完成以降この時期までに，銚子観光が海水浴を中心とした海岸観光地化し，名所としての寺社の地位が相対的に低下したことの表れと考えられる。海水浴客の増加傾向

第１表 『案内書』に見る名勝の紹介

名勝		明治41年(1913)		大正２年(1913)		昭和３年(1928)		昭和15年(1940)	
寺社	川口神社	○		○	●	○	●	○	
	浅見神社			○					
	渡海神社			○		○	●		
	浅間山（浅間神社）	○							
	円福寺（飯沼観音）	○	●	○		○	●	○	
	川福寺	○							
	妙見堂妙福寺		●	○		○			
	和田不動	○		○					
	宝満寺			○		○			
	東岸寺	○		○		○			
	光厳寺	○							
	威徳寺	○							
	浄国寺			○		○			
	賢徳寺	○		○		○	●		
	高福寺					○	●		
	長者仁王尊					○			
旧跡	千人塚	○		○		○			
	川口台場			○					
	御野立所					○			
	庄川歪左衛門の墓					○			
	吉田東吾博士碑						●		
自然	女夫ヶ鼻	○	●	○		○		○	
	伊勢路ヶ浦		●	○	●	○			
	黒生浦	○	●	○	●	○	●	○	
	犬吠岬		●	○	●	○	●		
	酉明浦		●	○		○			
	外川浦	○	●	○	●	○			
	犬若岬		●		●			○	●
	犬若浦	○	●	○		○	●		
	千騎ヶ岩（仙ヶ窟）		●			○	●		
	名洗浦		●	○		○			
	海鹿島浦	○			●	○	●	○	
	君ヶ浜	○		○	●	○	●		
	長崎浦	○		○		○	●		
	屏風ヶ浦								●
施設	無線電信局		●	○	●	○	●		
	犬吠埼灯台	○	●	○	●	○	●	○	
	波動電気			○					
海水浴場	酉明浦（犬吠）		●	○		○			
	黒生浦					○		○	
	海鹿島					○	●	○	
	犬若					○	●	○	
	外川					○	●		
	名洗							○	
その他	銚子川口		●	○		○	●		●
	銚子漁港								●
	波崎					○	●		
	松岸					○			
	天王台愛宕山の遠望					○		○	
	瀧の山					○			
	大利根						●		
	利根河畔							○	
	水郷巡り					※１		※２	

（明治41年発行『銚子案内』・大正２年発行『銚子案内』・昭和３年発行『銚子案内』・昭和15年発行『銚子商工案内』より作成）

注）○印＝紹介文の記載あり。●印＝写真の掲載あり。

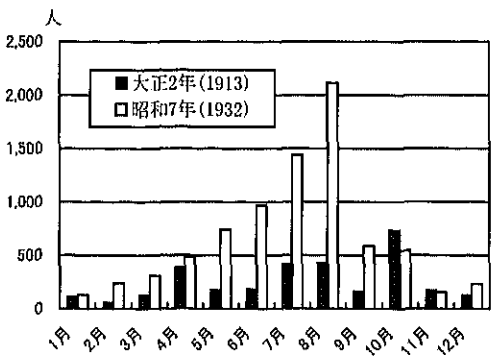
※１：汽船利用（横利根閘門，牛堀，潮来，鹿島神宮，香取神宮）

※２：汽車・汽船・自動車利用（鹿島，潮来，香取，三里塚，成田）

は，大正２年（1913）と昭和７年（1932）における暁雞館の月別利用客数にも現れている（第２図）。これをみると，大正２年では月ごとの来客数に大きな差は見られないが，昭和７年では９月を頂点とした夏季に来客数の集中がみられる。

なお，昭和初期に発行された二つの案内書には「水郷めぐり」が紹介されている[35]。このことは，銚子が単独の観光地としてではなく，近隣の観光地と組み合わせて紹介されるようになってきたものとして読みとることができる。また，水郷めぐりとして紹介される観光地の組み合わせは，利用する交通機関の発達によって変化している。汽船のみの利用で紹介されている昭和３年（1928）では，現在の千葉県佐原市にある横利根川大閘門や霞ヶ浦沿岸の牛堰，潮来などが組み合わされているが，汽船のほか，鉄道や自動車を利用した紹介がなされている昭和15年（1940）では，成田までを含んでいる。昭和５年（1930）には本稿で扱った案内書のほかに，銚子を中心に水郷観光を紹介した案内書『水郷の魅惑[36]』も発行されており，銚子観光を水郷観光と組み合わせた様々な観光コースが紹介されている。

以上では，４つの案内書に紹介された銚子の名勝から銚子観光の変容について見てきた。これら案内書の比較から，大正期から昭和初期にかけて銚子は海岸観光地化し，その過程で犬吠付近が観光の一拠点化してきたことが把握された。



第２図　暁雞館月別来客数の比較
（「大正二年度第十五回営業報告書」，「昭和八年度第十六回営業報告書」より作成）

次章では犬吠付近が銚子観光の一拠点となるうえで重要な役割を果たした，暁雞館と鉄道会社について，その株主や経営者を中心に考察を進める。

Ⅳ　観光開発資本の動向と銚子観光

犬吠埼灯台の設置以降，犬吠付近では旅館や鉄道の整備がおこなわれ，銚子観光における犬吠の位置付けが大きく変わった。本章では，こうした旅館や鉄道会社に出資する資本家や，経営に携わる人々について考察を進める。ここで取り上げる旅館は，先述のように犬吠付近で最初に立地した旅館として，暁雞館を取り上げる。また鉄道会社としては，遊覧鉄道と銚子鉄道株式会社（以下，銚子鉄道と略記）をそれぞれ取り上げる。なお，大正２年（1913）に営業を開始した遊覧鉄道は，大正７年（1918）に廃業するまで，暁雞館と経営を統合していた。銚子鉄道は大正11年（1922）に設立し，大正12年（1923）に営業を開始した会社で，前記の遊覧鉄道とは別会社である。

１）暁雞館の株主と役員

犬吠付近において，最初に立地した旅客滞在のための施設としては，茶屋に起源をもつ暁雞館が挙げられる。暁雞館が最初に株式会社組織となったのは，明治32年（1918）である[37]。その後，暁雞館は鉄道事業を分離した大正７年（1918）と，大手ホテルグループによる経営[38]となった昭和60年（1985）に会社組織が改変されている。ここでは，暁雞館の出資者のうち，20株以上を所有する株主について，同館が鉄道事業と経営を統合する以前の大正２年（1913）と，鉄道事業との分離後である昭和８年（1933）をそれぞれ同年次の営業報告書[39]に記載された株主氏名録から第２表と第３表にまとめた。この２表を比較すると，大正２年では，総株数750株を48名が所有している。これ対し，昭和８年は総株数1000株を85名が所有している。株主１人の平均所有株数をみると，15.6

第２表　株式会社暁難館20株以上所有株主一覧　（大正２年）

株主名	居住地	所有株数	備考
山口文右衛門	銚子町	60	肥料商
熱田藤助	銚子町	57	材木商，肥料商
田中玄蕃	本銚子町	50	銚子醤油株式会社
浜口吉兵衛	銚子町	50	銚子醤油株式会社
明石敬治		50	材木商，銚子汽船株式会社
岡田源吉	銚子町	36	肥料商，呉服太物商
小野田周斎		28	医師，銚子遊覧鉄道株式会社，県会議員
関亮柄		27	
高橋順五郎		27	銚子鉄道株式会社常務
岩崎重次郎	銚子町	25	味噌製造業
今津栄治		25	
常枝宇兵衛	銚子町	21	薬種商
山口藤兵衛	高神村	20	高神村長
全株主　48名総株数		750株	

（「大正二年度第拾五回営業報告書」，『日本全国商工人名録』，『大日本商工録』より作成）
注）備考欄は株主の職業などを示し，空欄は不明。

第３表　株式会社暁難館20株以上所有株主一覧　（昭和８年）

株主名	居住地	所有株数	備考
浜口吉兵衛	千葉	80	銚子醤油株式会社
岩崎千代	東京	50	
浜口吉右衛門	東京	50	銚子醤油株式会社，富士瓦斯紡績株式会社
浜口儀兵衛	千葉	50	ヤマサ醤油株式会社
明石敬治	千葉	45	材木商明石屋，銚子汽船株式会社
大里庄治郎	千葉	45	肥料砂糖荒物商
篠口龍司	千葉	37	
深井吉兵衛	千葉	35	合名会社深井商店，銚子醤油株式会社
松本憲治	千葉	35	
石上新藤	千葉	31	酒類醸造
高橋順五郎	千葉	30	銚子鉄道株式会社常務
黒田静三郎	千葉	30	
小野田菊治郎	千葉	27	
渡辺政治	千葉	25	澱粉商，土産物
遠山市郎兵衛	東京	20	東京醤油問屋
中條幸吉	東京	20	東京醤油問屋
宮内彌一	千葉	20	
木村平右衛門	和歌山	20	
根本得太郎	千葉	20	
篠木茂	千葉	20	銚子醤油株式会社
全株主　85名		総株数　100株	

（「昭和八年度第拾六回営業報告書」，『日本全国商工人名録』，『大日本商工録』より作成）
注）備考欄は株主の職業などを示し，空欄は不明。居住地は府県名を示す。

株から11.8株へと減っており，小口の株主が増加したものといえる。大正２年に20株以上所有する大口の株主で，居住地と職業が明らかなものを見ると，銚子町在住者が４人，本銚子町と高神村の在住者がそれぞれ１人となっており，様々な業種の出資者がみられる（第２表）。そのなかでも比較的，肥料や材木を扱う商人や醤油醸造業に関わるものが多い。なお，暁雞館の設立にあたっては，医師である小野田周斎が加わっている。この事実は，暁雞館が潮湯治客を相手に海水浴を開始した事とあわせ，今後の検討が必要である。昭和８年に20株以上を所有する株主をみると，大正２年と比べ，醤油醸造業に携わる株主が上位になっていることが指摘しうる（第３表）。このように様々な業種の株主から，醤油醸造業者に集中することで，暁雞館の運営は，醤油産業資本によって支えられていたものと考えられる。暁雞館と醤油産業資本とのつながりは，銚子の醤油醸造業者が東京の醤油問屋などを接待する場として暁雞館を使用していたことにもみられる[40]。また，株主の居住地については，府県単位の把握となるが，上位の株主に東京府に居住する株主も複数みられる。このように，遠方に株主が分散している点や，醤油醸造業に関る人々が大口株主として名を連ねている点については，銚子の産業界の動向を含めて，今後の検討が必要になる。

次に，暁雞館の資本が醤油醸造業者に集中する中，暁雞館の経営に関わっていた役員について，大正７年の株式会社登記簿[41]から検討する（第４表）。大正７年の登記簿は，暁雞館が遊覧鉄道と経営を分離し，会社組織を再編した時に作成されたものである。第４表をみると，当時の経営陣は４人の取締役と２人の監査役となっている。先述の株主の検討では，大正期から昭和初期にかけて，醤油醸造業関係者が大口株主となる傾向が見られたが，彼等が役員として経営に参加していた様子は見られない。

以上のように暁雞館は，多様な業種に携わる人々の出資から，醤油産業に携わる人々の出資に変わりつつ，醤油産業の大口株主が直接経営に関らないかたちで運営されていたことがわかる。

２）二つの鉄道会社の株主と役員

灯台建設以来，犬吠付近が銚子観光における一拠点となる中で，前述のように総武鉄道の銚子駅と犬吠付近を結ぶ鉄道の整備が行われた。大正２年（1913）から大正７年（1918）まで営業した，最初の鉄道が遊覧鉄道であり，遊覧鉄道の廃業後，大正12年（1923）に営業を開始したのが銚子鉄道である[42]。遊覧鉄道の設立当初の株主についてみると，遊覧鉄道の総株数3000株は，258名の株主が所有している（第５表）。１株は50円で，株主１人の平均株式所有は11.6株となっている。こうした中，大口の株主では，醤油醸造業に関わるものが多く，銚子醤油株式会社の浜口吉右衛門と浜口吉兵衛がそれぞれ200株，田中玄蕃が110株所有している。遊覧鉄道の株主には，野田醤油株式会社の茂木七郎右衛門や神谷酒造合資会社の神谷傳兵衛など，銚子以外に居住する人々も見うけられる。こうした人々は，銚子醤油株式会社の浜口氏らとの事業上の結びつきにより，出資していたものといわれている[43]。遊覧鉄道は，こうした醤油醸造業関連の資本により設立された鉄道会社であったが，会社設立の目的では，観光客の輸送に主眼が置かれていた。会社設立の目的について，「銚子遊覧鉄道株式会社設立趣意書[44]」では，銚子を訪れる観光客が増加しつつあったことを挙げた上で，以下のように記されている。

第４表　株式会社暁雞館役員一覧（大正７年）

役職	氏名	備考
取締役	明石敬治	材木商
取締役	渡辺政治	澱粉商
取締役	高橋順五郎	銚子鉄道株式会社
取締役	小野田周齊	医師・県会議員
監査役	石上新藤	酒類醸造
監査役	松本新之助	銚子倉庫株式会社

（「株式会社登記簿」，『日本全国商工人名録』，『大日本商工録』より作成）
注）備考欄は職業などを示す。

銚子駅ヨリ各海岸ニ至ルノ交通機関備ハラズ茲ニ於テ此ノ鉄道ヲ敷設シ以テ其不便ヲ除去シ益々多クノ来遊者ヲ誘致シ外川長崎海鹿島黒生等ノ各浦ヨリ獲得スル水産物或ハ石材及ビ瓦等ノ生産額極メテ多シ是等饒多ノ物資ヲ迅速ニ運搬シ運賃ヲ軽減シ随ツテ産出額益々多カラシメ尚沿海住民地方ノ日用品及ビ各種製造ニ要スル材料ノ輸送ヲ便ナラシメントス

こうした記述から，遊覧鉄道は海岸への観光客輸送を主目的としつつ，沿線での生産物やその原料，住民の日用雑貨類などの貨物輸送を行なう目的で設立されたものと考えられる。

次に遊覧鉄道が設立された当初の会社役員につ

第５表　銚子遊覧鉄道株式会社株主のうち30株以上所有者　（大正２年）

株主名	所有株数	備考
濱口吉右衛門	200	銚子醤油株式会社，富士瓦斯紡績株式会社
濱口吉兵衛	200	銚子醤油株式会社
田中玄蕃	110	銚子醤油株式会社
岩崎重次郎	100	味噌製造業
茂木七郎右衛門	100	野田醤油株式会社
徳川頼倫	50	侯爵
常枝保	50	
遠山市郎兵衛	50	東京醤油問屋
小倉久兵衛	50	
和田豊治	50	富士瓦斯紡績株式会社
神谷傳兵衛	50	神谷酒造合資会社
野田豁通	50	男爵
山口卯之助	50	
深井吉兵衛	50	合名会社深井商店，銚子醤油株式会社
布施鷹助	50	
小野田周齊	35	医師，株式会社暁鶏館，県会議員
岩崎為吉	30	
中條幸吉	30	
大橋幸吉	30	
大村五左衛門	30	
中井半三郎	30	東京醤油問屋
中澤彦吉	30	東京醤油問屋
久保田段八	30	
松本信之助	30	株式会社暁鶏館
前田兼七	30	
升本喜三郎	30	東京醤油問屋
国分勘兵衛	30	東京醤油問屋
明石敬治	30	材木商，銚子汽船株式会社
斎藤福之助	30	
宮崎常三郎	30	
廣岡助五郎	30	
森六郎	30	東京醤油問屋
鈴木忠右衛門	30	
全株主　258名	総株数　3000株	

（「大正２年銚子遊覧鉄道株式会社創立総会資料」，『日本全国商工人名録』，『大日本商工録』より作成）
注）備考欄は株主の職業などを示し，空欄は不明。

いて検討を加える（第6表）。第6表に示した役員を，第5表に示した株主と比較すると，株主のなかの5人が役員として会社の経営に携わっていることがわかる。また，出資者の中では醤油醸造業関連の人々が大口の株主となっていたが，役員を見ると，醤油醸造業関係の人物は，取締役社長の浜口氏のみとなっている。さらに，第4表で示した大正7年の暁雞館役員として確認された人物が4人加わっている。このように，遊覧鉄道は，醤油醸造業に携わる人々の出資によって設立されたが，経営は暁雞館と密接なつながりを持っていたものといえる。このような経営面のつながりから，遊覧鉄道は開業後間もない大正2年に，暁雞館と経営を統合した。この両社の経営統合により，観光客の犬吠方面への移動手段が確保されたことは，犬吠付近の観光拠点化をさらに強めたものと考えられる。しかし，大正3年（1914）に勃発した第一次世界大戦の影響で，鉄鋼類の価格が高騰すると，銚子以外に居住する資本家が多かった遊覧鉄道では，レールや車両を売却して利益を得る方針をとった。このため，同社は大正6年（1917）に廃業した[45]。大正6年から大正11年（1922）の5年間は，暁雞館が自動車部を設立し，鉄道線路敷地を暁雞館のバス専用道路として，宿泊者の輸送を行なった。

遊覧鉄道の廃業後の大正11年には，新たに銚子鉄道が設立され，翌大正12年に銚子・外川間を開業させた。銚子鉄道の路線のうち銚子・犬吠間は，暁雞館がバス路線として使用していた遊覧鉄道の旧路線をそのまま使用し，犬吠・外川間は新たに延長したものである。銚子鉄道設立当時の大口株主についてみると，総株数は不明であるが，遊覧鉄道設立時と比べ，上位の大口株主の所有株数が格段に多くなっている（第7表）。遊覧鉄道に多くの出資をしていた神谷傳兵衛や茂木七郎右衛門などは，上位の大口株主として現れず，小口の出資にとどまっている[46]。さらに，ヤマサ醤油株式会社の浜口儀兵衛や肥料商大里庄治郎など，銚子の代表的な事業家らは，遊覧鉄道には出資していなかったが，銚子鉄道には大口の株主として名を連ねている。また，海鹿島に別荘地を整備する計画を持っていた武田辰之助[47]が大口の出資をしている。

次に，銚子鉄道の役員について見ると，4人の役員が遊覧鉄道の役員から引き継がれている（第8表）。さらに大里庄治郎が経営陣に加わっていることから，銚子鉄道の経営は，遊覧鉄道時代に比べ，銚子の産業界との関わりが，より強まっていたものと思われる。

以上，本章では犬吠を中心とした観光事業において，特に大きな役割を果たしたと思われる旅館と鉄道会社について，出資者や経営者から考察を進めた。この考察からは，以下のことが明らかと

第6表　銚子遊覧鉄道株式会社役員一覧（大正2年）

役職	氏名	備考
取締役社長	浜口吉兵衛	銚子醤油株式会社
専務取締役	小野田周齊	医師，県会議員
取締役	岩崎重次郎	味噌製造業
取締役	松本信之助	銚子倉庫
取締役	明石敬治	材木商
監査役	大橋幸吉	銚子信用金庫理事
監査役	石上新藤	酒類醸造
監査役	吉植庄一郎	

（「銚子遊覧鉄道株式会社創立総会資料」，『日本全国商工人名録』，『大日本商工録』より作成）
注）備考欄は職業などを示し，空欄は不明。

第7表　銚子鉄道株式会社株主のうち200株以上所有者（大正11年）

株主名	居住地	所有株数	備考
浜口吉兵衛	銚子町	550	醤油醸造業
浜口儀兵衛	銚子町	500	醤油醸造業
宮崎鶴松	東京市	500	鉄材販売商
山口卯之助	東京市	300	
岩崎重次郎	銚子町	200	味噌製造業
大里庄治郎	銚子町	200	肥料砂糖荒物商
武田辰之助	東京市	200	海鹿島別荘地開発
深井吉兵衛	銚子町	200	醤油醸造業
全株主　253名			

（「第二回営業報告書」，『岬へ行く電車』，『日本全国商工人名録』，『大日本商工録』より作成）
注）備考欄は株主の職業などを示し，空欄は不明。

第8表　銚子鉄道株式会社役員一覧（大正11年）

役職	氏名	備考
取締役	小野田馬齊	材木商
取締役	高橋順五郎	株式会社暁雞館
取締役	明石敬治	材木商，銚子汽船株式会社
取締役	松本信之助	銚子倉庫
取締役	石上新藤	酒類醸造
監査役	宮崎鶴松	鉄材販売商
監査役	大里庄治郎	肥料砂糖荒物商
監査役	松本徳太郎	銚子汽船株式会社

（「株式会社登記簿」，『日本全国商工人名録』，『大日本商工録』より作成）
注）備考欄は職業などを示す。

なった。まず暁雞館については，次のことを指摘しうる。犬吠付近の観光開発の先がけとなった暁雞館は，銚子の多様な産業に携わる人々の出資により設立され，次第に醤油産業関係者の出資が多くなった。しかし暁雞館の経営は，そうした動向に関わらず，醤油産業からは独立して行われていた。二点目は，二つの鉄道会社に関する次の点である。最初に設立された遊覧鉄道は，銚子内外に居住する醤油産業の資本家により設立された会社であったが，設立直後には，大正期に醤油産業関係者の出資が多くなりつつあった暁雞館と経営を統合した。この経営統合により，犬吠方面への観光客輸送と宿泊事業が確立されたことは，犬吠方面の観光拠点化が一層進んだことを窺わせる。さらに，三点目には，銚子以外に居住する資本家が，遊覧鉄道の廃業と同時に撤退すると，銚子在住の多様な産業に関わる資本家が出資するようになったことである。こうしたことによって銚子の観光開発は，銚子の産業界全体が一体となって支持する形になったことが指摘できる。

V　むすびにかえて

本報告では，銚子観光の変遷について，観光拠点としての「犬吠」の形成と，犬吠付近の観光開発に関わる開発資本の動向という視点から考察を進めてきた。三方を海で囲まれた銚子は，変化に富んだ海岸の風景が見られるばかりではなく，古くから栄えた港町であったことから，多くの人々の関心を惹きつけてきた。しかし，時代の変遷により，観光客の関心対象には変化がみられ，それに応じて銚子の観光も変容してきた。特に，近代初頭に犬吠埼灯台が設置された前後では，銚子観光の内容に大きな変化が生じていたものと考えられる。

犬吠埼灯台が設置される以前の銚子観光については，近世に銚子を訪れた文人の作品から推察した。彼らの作品に紹介された銚子の名所は，寺社や港町の情景を紹介した町場の部分と，荒波に削られた磯浜を紹介した部分に大別できる。こうした作品から，犬吠埼灯台設置以前の銚子観光は，町場の寺社と磯浜巡りの二つが重点であったことがわかる。こうした銚子観光において犬吠付近は，磯浜巡りの一地点として紹介されているのみであった。

明治2年（1869）に犬吠埼灯台が，日本で最初の洋式灯台の一つとして設置されると，次第に灯台見物に犬吠を訪れる人々が現れるようになった。こうした観光客の出現は，銚子の人々が犬吠付近で観光客相手の商売を始めるきっかけともなりえた。しかし，灯台の設置後しばらくは，犬吠に宿泊施設がなく，灯台見物も銚子の町場を拠点とした観光に組み込まれていたものと考えられる。明治後期に，潮湯治客向けの旅館が犬吠付近に建設されたことや，犬吠が皇族の別荘を建設する場所に選ばれたことは，犬吠付近が，それまでの磯浜巡りの一地点から，滞在の拠点へと変化したことを意味していた。

さらに，犬吠付近が銚子観光における一拠点となるには，銚子の資本家らの動向が作用していた。総武鉄道の開通などに伴って，多くの観光客が訪れるようになると，銚子の醤油産業に関わる資本家らは，総武鉄道の銚子駅から犬吠方面に遊覧鉄道を開業させた。遊覧鉄道は，銚子以外に居住する資本家の支援も受けていたため，経営状況の悪化に応じて廃業を選択した。遊覧鉄道の廃業

後は，醤油産業だけにとどまらず，多様な産業に関わる銚子の資本家によって銚子鉄道が設立された。犬吠付近が銚子観光における拠点となる中，特に資本家らが鉄道による観光客輸送に乗り出した大正期は，日本人の旅行熱が大正期からはじまったといわれることと一致し[48]，銚子観光における大きな画期であったと考えられる。こうした資本家らの動向が，一般大衆の旅行意欲と結びついた結果，銚子は今日に通じる観光地化を果たした。以上のような，犬吠の観光拠点化を中心とした銚子観光の変容は，明治後期から昭和初期に刊行された，各種案内書の記述からも窺うことができた。

本報告では，観光地としての銚子の変遷を考察してきたが，観光関連の事業と醤油醸造業をはじめとした銚子の産業界の動向との対比が充分に行なえなかった。今回扱った暁雞館と二つの鉄道会社に出資する人々や経営に携わる人々をみても，これら観光関連の事業は，銚子の産業界と関わる多くの人々によって行われていたことがわかる。そのため，銚子観光の変遷について，より詳細な検討を加えるには，銚子の産業界の動向を含めて考える必要がある。

付　記

本報告を作成するにあたり，多くの方々からご協力を頂きました。銚子市教育委員会をはじめ，銚子市青少年文化会館，銚子市公正図書館，千葉地方法務局銚子出張所の皆様には，貴重な資料の閲覧に便宜をはかって頂きました。銚子市文化財審議会委員の永沢謹吾先生には，資料の提供をして頂いたばかりでなく，調査全般にわたってきめ細かなご教示を頂きました。また，暁雞館支配人の石毛豊秋氏，犬吠埼ロイヤルホテル専務取締役の小野田忠行氏，銚子電気鉄道株式会社鉄道部次長の向後功作氏，銚子市観光協会常務理事の宮内三郎氏，銚子市妙見町の香取佳子氏，銚子市新生町の吉沢勝彦氏をはじめ，多くの皆様には貴重な資料の閲覧や複写にご協力を頂いたほか，多くのご教示を頂きました。また，島根大学の舩杉力修氏には，資料についてのご助言を頂きました。以上，記して深く感謝申し上げます。

注および参考文献

1）銚子市産業部商工観光課（2000）：『CHOSHI GUIDE BOOK　銚子　観光案内』，銚子市産業部商工観光課。
2）銚子市史編纂委員会編（1956）：『銚子市史』，銚子市，436～467，882～917など。
3）前掲2）。
4）老川慶喜（1999）；箱根開発と箱根土地会社－堤康次郎の事業活動－，地方史研究協議会編『都市・近郊の信仰と遊山・観光』，雄山閣出版株式会社，258～277。
5）三木理史（2000）：『地域交通体系と局地鉄道：その史的展開』，日本経済評論社。
6）白土貞夫（2001）：『岬へ行く電車－銚子電気鉄道77年のあゆみ－』，東京文献センター。
7）浮田典良・伏見能成（1999）：新旧ガイドブックを通じて見た河内の「名所」，歴史地理学，41-2，23～34。
8）銚子を訪れてはいないが，銚子市内に文学碑等が建立されている作家も含み，58人の名前が挙げられている。永沢謹吾編（1989）：『銚子の文学碑めぐり　銚子と文学者とのふれあい』，銚子市教育委員会。
9）前掲8），133～135。
10）銚子市青少年文化会館所蔵。
11）柳田国男校訂（1938）：『利根川図志』，岩波書店。
12）永瀬恵子（1990）：英派研究序（二）－高嵩谷を中心に－，日本美術工芸，12-627，20～29。
13）『日刊大衆日報』第12466号（平成4年（1992）1月18日）記事より。
14）赤松宗旦の系譜や『利根川図志』の編集については，柳田国男校訂（1938）：『利根川図志』，岩波文庫の解題による。
15）銚子観光協会編（1935）：『犬吠埼燈台史』，銚子観光協会，3ページ。
16）前掲15），7ページ。
17）犬吠埼ブラントン会編（2000）：『公開シンポジウム　犬吠埼灯台とR.H.ブラントン報告書』，犬吠埼ブラントン会，5ページ。
18）前掲15），2ページ。
19）香取佳子氏による。香取氏は，昭和34年（1959）から昭和61年（1986）の間，経理担当として暁雞館に勤めた経験がある。
20）暁雞館には，「明治二十二年十一月一日釘立　明治二十二年十二月廿八日上棟　棟樶　共同暁鶏館　海水浴室第三　建築　　明治二十三年三月日

落成」と記された棟札が保存されている。ここに記された年号から，明治20年代の始め頃には旅館業を開始していたものと推察される。

21) 今日の暁雞館は，昭和60年（1985）から日本ビューホテルチェーンの系列となっている。

22) 小口千明（1986）：潮湯の偏在性に関する地理学的予察－日本における海水浴普及との関連から－，城西大学開学二十周年記念論文集城西大学人文研究13，57～74。

23) 伏見宮家は，崇光天皇の第一皇子栄仁親王（1351～1416）を祖としており，明治維新以降の十余宮家のうち，大正天皇の直宮三家を除いたすべての宮家は伏見宮家から出ている。このため，宮家の中でも特に由緒が古い宮家といわれている。東京農業大学造園学科庭園学造園学原論研究室（1984）：『伏見宮家別邸　瑞鶴荘庭園調査報告書』，1～4。

24) 前掲23)，10ページ。

25) 前掲23)，10ページ。

26) 前掲23)，10～15。

27) 岩上方外（1913）：『銚子案内』，帝国名勝誌出版協会。

28) 鈴木誠（1985）：旧伏見宮家別邸銚子瑞鶴荘の庭について，造園雑誌48-5，61～66。

29) 杉原康定（1908）：『銚子案内』，中村書店。

30) 前掲27)。

31) 鳥羽章（1928）：『銚子案内』，千葉タイムス社。

32) 雨宮茂民編（1940）：『銚子商工案内』，銚子商工会議所。

33) 前掲29)，1ページ。

34) 香取佳子氏による。犬吠埼の南側に続く海岸であり，暁雞館が立地する付近を指す。

35) 霞ヶ浦や北浦沿岸の鹿島，潮来，佐原といった観光地を巡る「水郷めぐり」は，昭和4年（1929）に石岡鉾田間を開通させた鹿島参宮鉄道株式会社でも，汽船を利用した観光コースが紹介されている。「鹿島参宮鉄道及連絡船航路図」，千葉県立大利根博物館編（1999）：『写真集　絵はがきにみる水郷』所収。

36) 今野白洋編（1930）：『水郷の魅惑』，文港堂書店。

37) 株主総会資料として毎年作成される営業報告書のうち，今回確認することが出来た大正2年（1913）「第十五回営業報告書」（石上藤太氏所蔵）から株式会社設立年次を特定した。

38) 前掲21)。

39) 大正2年（1913）については，前掲36）の「第十五回営業報告書」により，昭和8年（1933）については銚子市青少年文化会館所蔵「第十六回営業報告書」により作成。

40) 大正9年（1920）からヤマサ醤油株式会社に勤務し，昭和16年（1941）から昭和30年（1955）まで取締役や監査役などを務めた外岡松五郎氏の回顧録によれば，毎年東京の醤油問屋が新年の挨拶に来訪する際は，銚子の醤油組合の者が駅まで出迎え，駅周辺の大新旅館で午餐を提供し，夜は暁雞館で宴会を催したという。外岡松五郎（1970）：『銚子回顧』，信太書店，29～30。

41) 千葉地方法務局銚子出張所所蔵。

42) 現在，銚子・外川間を営業している銚子電気鉄道株式会社は，昭和23年（1948）に企業再建法によって解散した銚子鉄道株式会社の資産を引き継いだものである。前掲6)，71ページ。

43) 前掲6)，22～25。

44) 前掲6)，20～21。

45) 前掲6)，20～21。

46) 前掲6)，57ページ。

47) 武田辰之助は仙台出身であり，銚子に移住後，海鹿島に「海鹿島保健別荘地」を建設した。この別荘地開発の状況について，詳細は不明である。武田辰之助は海鹿島のほか，神奈川県の鎌倉でも「鎌倉由比ガ浜土地合資会社」を設立し，昭和4年（1929）に住宅地とホテルの建設計画を企てている。鎌倉でのこの開発は，漁場や海水浴場への影響が懸念されたことから住民の反発を受け，完成に至らなかった。鎌倉市（1994）：『鎌倉市史近代通史編』，吉川弘文館，361～362。鎌倉市（1990）：『鎌倉市史近代史料編二』，吉川弘文館，411～415。

48) 白幡洋三郎（1996）：『旅行ノススメ　昭和が生んだ庶民の「新文化」』，中央公論社，53～83。